

「落窪の君が壁を越えた時」

Martin Tirala (ティララ・マルティン)

カレル大学・准教授

『源氏物語』以前にも様々な物語作品があったようであるが、現存する作品はわずかである。その中でも十世紀の終わりに書かれた『落窪物語』が特別な位置を占めている。『落窪物語』は『うつほ物語』のような作り物語であり、『伊勢物語』や『大和物語』などのような歌物語と違い、断片的ではなく、一つの長い話をゆらぎなく展開する。そして作り物語でありながら、超現実的な現象が含まれず、あまりにも現実的であるので、当時の社会がある程度反映されていると言われている。しかしながら、その描写された世界は現実的だとは言え、あくまでも作られた話であり、フィクションの世界であることに相違ない。『落窪物語』の登場人物は平安中期の貴族階級の人々により理想化された人間であり、悪い人は超悪人になったり、良い人はスーパーヒーローになったりしている。江戸時代の滝沢馬琴の読本に見られる勧善懲悪小説のような世界である。しかし、幸いに教訓的な物語ではない。

『落窪物語』は一般に継子虐めの物語の代表作であると言われているが、ある意味で、この作品はこのジャンルのパロディーであるとも言える。西洋のシンデレラの童話的な面もあるが、『落窪物語』の女主人公である「落窪の君」は父中納言にまで蔑視され、救出してくれた魅惑の王子に当たる道頼は落窪の君を幸せにただけではなく、彼女を長年虐めた父中納言一家に復讐まで遂げる。十世紀の終わりにはすでに継子虐めの話型が存在し、新しいテーマではなかったようである。古本の『住吉物語』などの散佚してしまった物語はおそらく『落窪物語』の先に書かれ、流布していたと思われる。『落窪物語』の面白さは特にそれまでの継子虐めの話型を越えたところ、その話型を崩しながら展開したところにある。

『落窪物語』の話の後半の主人公は落窪の君より、彼女を狭い物置部屋から救出してくれた道頼であると断言できる。この理想化された貴公子は一步步自分の復讐計画を実現する。その復讐は残酷にも見えるかもしれないが、物語の終わりには中納言一家と和解をし、ハッピーエンドで話を終わる。その間、落窪の君は時折夫道頼、あるいは「あこぎ」と帯刀らの行為についてコメントし、自分の気持を表す。落窪の君は物語の言説にあまり影響を及ぼしていないと言われているが、それは本当なのであろうか。本発表では、落窪の君はいかなる虐めを受けたか、落窪・物置部屋より救出されたとき、そして、継母に築かれた壁を越えたとき、何を考えていたのであろうか、どうやって夫道頼の復讐を越えようとしていたのか、ということを解明してみたい。